

# アラビア語チュニス方言のアスペクトを表示する前置詞

その統語的特徴と意味

熊切拓

takukuma@t3.rim.or.jp

キーワード：アラビア語 方言 統語論 前置詞 アスペクト  
継続相 習慣相 反復相 文法化

## 要旨

本稿ではアラビア語チュニス方言の前置詞*fi-* (〜の中) を取り上げ、この前置詞が動詞のアスペクトに関わる特殊な用法について、その統語的特徴と意味的特徴に関して記述を行った。統語的特徴としては、このアスペクトを表示する*fi-*が基本的には動詞未完了形と直接目的語との間に現れること、動詞文ではなく名詞文的な否定形式をとること、自動詞の補語となる前置詞句の前置詞と交代する場合があることなどを指摘した。またその意味的特徴には、動詞が瞬間的な動作を表す場合には反復相と習慣相を、それ以外の動詞では継続相と習慣相を表しうること、延長されたり、誇張されている行為を表現する場合があること、アスペクト的*fi-*に続く名詞の性質や数によっても文意が変わることがあり、これらを踏まえて、アスペクト的*fi-*のもっとも基本的な意味は継続相と反復相であると分析した。さらに、このアスペクト的*fi-*の文法的範疇について考察を行い、前置詞としての働きも保持しながらも、アスペクト標識として文法化しつつある要素であると結論づけた。

## 1. 導入

### 1-1. 対象となる言語

本稿が対象とする言語はチュニジア共和国の首都、チュニスにおいて話されるアラビア語方言であり、アラビア語西方言マグレブ方言に分類される(中野 1989:477-479)。ただしチュニス方言といっても、本稿で取り上げるのは、生粋のチュニス住民が用いる伝統的な言語(Singer 1984)でも、チュニスのユダヤ人社会で用いられる言語(Cohen, D. 1975)でもなく、移住者を含むチュニスの住民全体が共通に用いる言語(コイナー)(Gibson 2009:563)である(2004年のセンサス<sup>1</sup>によれば、チュニスの人口は983,861、大チュニスと呼ばれるチュニス周辺の3県, Ariana, Ben Arous, Manoubaを含めると2,247,792)。

### 1-2. 音韻

母音は長短あわせてa, i, u, a:, i:, u:, əの7種(ただし, əが借用語に現れる)。子音は, b, b', m, m', f, t, t', d, d', n, r, r', θ, ð, s, s', z, ʒ, ʒ, l, l', k, g, x, y, q, h, ʔ, ʔ, h, w, yの33種。

<sup>1</sup> チュニジア国立統計院 (<http://www.ins.nat.tn>) による2004年センサスより。2012年7月27日閲覧。

## 1-3. 文法のあらましと略号

語順はSVOもしくはVSO。動詞には完了形、未完了形、命令形があり<sup>2</sup>、人称・性・数（1人称単数／複数、2人称単数／複数、3人称単数男性／単数女性／複数通性）によって活用する<sup>3</sup>。名詞には男性名詞と女性名詞があり、単複の区別がある。

なお、例文の語釈などで用いる略号は次の通り。

1,2,3：1人称、2人称、3人称 SG：単数 PL：複数 M：男性 F：女性  
 AP：能動分詞 DEF：定冠詞 FA：アスペクト的fi- FI：イディオムのfi-  
 FL：場所的fi- FUT：未来接辞 PERF：完了形 IMPF：未完了形  
 IMPR：命令形 NEG：否定辞（もしくは否定構成要素）

## 1-4. 資料

本稿で用いる資料は、1998年から2011年までの断続的な現地調査において集められたものである。調査に協力してくださったWacel Krirさん（男性、40代、チュニス生まれ）とTakalanca Linguistic Services (<http://www.takalanca.com/>)のFarouk Herziさん（男性、30代、チュニア西部出身、チュニス在住歴17年）に感謝を申し上げる。

なお、本稿で扱う例文のうち、末尾にローマ数字とアラビア数字が組み合わされて記されたものがある。これらはチュニス方言による物語集 *hika:ya:t al-Sarwi*: 『アルウィーの物語集』 (al-Sarwi, ʕAbd al-ʕaziz 1989 al-Dar al-Tunisiya li-Naʕr. Tunis) 全4巻のうちはじめの2巻から採られたものであり、ローマ数字は巻数、アラビア数字はページ数を示す。

<sup>2</sup> アラビア語および諸方言における完了形と未完了形という2種の動詞形式の区別がアスペクト的なものなのかどうかについては議論があり (Horesh 2009:455), Eisele (2006:196)は、両者の区別がアスペクトというよりも、過去と非過去（現在と未来）という時制的なものであるという説もあることを紹介している。そのため、この2つの形式の呼称については、純粋に形態的な観点からのみ名付け、名称にその意味を反映させないという立場もある (Holes 1995)。とはいえ、本稿ではアラビア語学の慣用に従う。なお、動詞を語彙として提示する場合は、やはりアラビア語学の慣用に従い、完了形3人称単数男性形をもってする。

<sup>3</sup> 未完了形は動詞の未完了形語幹に接頭辞と接尾辞が付されることで形成される。以下、未完了形語幹をXとし、一般的な活用および例として動詞xra3《出る》の活用を記す(∅はゼロ形式を表す)。母音Vの音価は未完了形語幹によって決まり、またXの最初の音節が単子音で始まる場合には落ちる。さらに、未完了形語幹が母音で終わる場合にも複数において例外的な活用形式をとる。なお、動詞xra3の未完了形語幹-xru3-は、複数形のすべてにおいて接尾される長母音u:の存在により短母音が落ち、-xru3-となる。

	単数	複数
1人称	nV-X-∅/nuxru3	nV-X-u:/muxru3u:
2人称	tV-X-∅/tuxru3	tV-X-u:/tuxru3u:
3人称男性	yV-X-∅/yuxru3	yV-X-u:/yuxru3u: (通性)
3人称女性	tV-X-∅/tuxru3	

## 2. 本稿で取り扱う言語現象

本稿で取り上げるのは、前置詞fi-4《〜の中に》が他動詞の直接目的語に前置されAspect表示として用いられる以下のような現象である。

(1) ya:kəl                      kuskɜi:.  
食べるIMPF3SG.M    クスクス  
「彼はクスクス（料理の名前）を食べる。」

(2) ya:kəl                      f-ol-kuskɜi:.  
食べるIMPF3SG.M    FA-DEF-クスクス  
「彼はクスクスを食べている。」

本稿では、(2)に見られるように動詞Aspectに影響を与えるこの前置詞をAspect的fi-（語釈ではFAとする）、この用法をfi-のAspect的用法、そしてこのAspect的fi-が現れている構文をAspect的fi-構文と呼び、この現象の統語的・意味的な記述および分析を行う<sup>5</sup>。

## 3. 先行研究

前置詞fi-のAspect的用法は、北アフリカのさまざまなアラビア語方言において報告されており、マグリブ方言全体に見られる現象と考えることができる（Marçais, Ph. 1977: 217）。まずチュニジア国内を見ると、チュニス方言（Singer 1988: 624, Gibson 2009: 569）、チュニスのユダヤ人方言（Cohen, D. 1975: 136, 248-249）、チュニジア中部のタクルーナ方言（Marçais et Guïga 1959: 3080-3082）、チュニジア第3の都市であるスーサ方言（Talmoudi 1981: 39, n.10）が挙げられる（とはいえ、チュニジア南部の遊牧民のアラビア語方言の記述したBoris 1958: 475-476には、その報告が見えない）。

また、チュニジア以外ではリビアの方言（東部方言はOwens 1984: 133-135, 200、ベンガシ方言はPanetta 1943: 253-254）、アルジェリアの方言（Djidjicelli方言はMarçais, Ph. 1956: 511-512、Cherchell方言はGrandHenry 1972: 143<sup>6</sup>、アルジェのユダヤ人方言はCohen, M. 1912: 253）、モロッ

<sup>4</sup> 前置詞fi-は文語の正書法ならびに方言で一般的に流布している書記法においては、人称辞が接辞される場合以外は分かち書きされる。しかしながら、この前置詞は、他のいくつかの前置詞と同様、単独で使用されることがないため、接辞として扱う。

<sup>5</sup> 本稿は、2000年6月のAFLANG研究会（アジア・アフリカ言語文化研究所）での口頭発表および第142回日本言語学会大会での口頭発表「アラビア語チュニス方言のAspectを表示する前置詞」（熊切 2011a）を発展させたものである。口頭発表において有益なコメントをくださった方々および本稿を査読してくださった方々に感謝を申し上げる。

<sup>6</sup> fi-について述べた箇所には記載されていないが、巻末のテキストにはAspect的fi-が見られる（ibid.: 188）。*an-na:s iku:nu yiffərɜbu f-ol-qa:hwa... (les gens sont en train de boire le café...)*（強調は筆者による）。

コの方言 (Harrell 2004: 209), モーリタニアのハッサニーヤ・アラビア語方言 (Cohen, D. 1963: 216) で報告されている。

一方, マグレブ方言に近隣するマルタ語<sup>7</sup>, またエジプト以東の諸方言では, こうしたアスペクト的fi-は報告されていないようである。古典アラビア語, 現代標準アラビア語にも同様に存在しない<sup>8</sup>。

このようにマグレブ方言のひとつの特徴ともいえるアスペクト的fi-ではあるが, マグレブ方言の中でもその用法には違いがある。特に, チュニス方言では, Mion (2006)の指摘するようにこの用法が他の方言よりも発達しており, 独自に取り上げるに値するものである。

アスペクト的fi-に関するこれらの先行研究において, 統語的・意味的に十分記述したものは無いようである。もっとも, チュンジアのタクルーナ方言 (Marçais et Guïga 1959: 3080-3082)の記述の精密さ, そしてリビア東部方言 (Owens 1984: 133-135, 200)での統語的観点からの記述は特筆すべきものである。本稿ではこれらの先行研究を踏まえて, アスペクト的fi-の用法の全体を検討する。

#### 4. アスペクト的用法以外の前置詞fi-の用法

本論に入る前に, 前置詞fi-が, アスペクト的用法以外にどのように使われているかを概観する。

前置詞fi-は, 古典アラビア語, 現代標準アラビア語および多くの方言で用いられている。その基本的な意味は空間に関わるもの (locative) であり, 通常〈～の中〉と訳すことができる。以下に挙げるのはチュニス方言の例である。

- (3) ma-θamma-ʃ                      ʃa:wa f-ol-bit.  
NEG-存在の副詞-NEG<sup>9</sup> 机    ～の中に-DEF-部屋

「その部屋の中には机はない。」

さらに, このような空間的な意味が拡張されて, 時間や抽象物の内部を比喩的に表す。

- (4) ma:-na:kəl-ʃ                      ha:za fə-sʃ-ba:h.  
NEG-食べるIMPF.1SG-NEG もの    ～の中に-DEF-朝

「わたしは朝はものを食べない。」

<sup>7</sup> ただし, 後段の注25を参照のこと。

<sup>8</sup> ただし, 『千夜一夜物語』と中世のチュンジア人作家による資料中に, このアスペクト的fi-が数例現れることをMarçais et Guïga (1959: 3081)は指摘している。

<sup>9</sup> 厳密に言えば, 無標の否定形式の後部要素として現れる-ʃは, 否定辞ではない。

(5) *hu:wa fi:-faql-u:*

彼 ~の中に-理性-3SG.M

「彼は理性的だ。」

(6) *ma:-fi:-h-f* *fa:yda. [-417]<sup>10</sup>*

NEG-~の中にある-3SG.M-NEG 利益

「それ（その事柄）に益はない。」

また、常にこの前置詞を伴って用いられる自動詞がある。ただし、本来的な場所的な意味との繋がりは必ずしも明らかではない。

(7) *tfa:ra:ʒt* *fi:-talʒa.*

見る PERF.1SG ~の中に-テレビ

「私はテレビを見た。」

(8) *ma:-na:fʒʒəb-f* *fi:-h.*

NEG-感嘆する IMPF.1SG-NEG ~の中に-3SG.M

「わたしは彼に驚かない。」

本稿では、(3)~(6)のように位置に関する用法の *fi:-* を場所的 *fi:-* (語釈では FL) , (7), (8) のように自動詞とともに慣用句を形成する *fi:-* をイディオムの *fi:-* (語釈では FI) と呼んで、アスペクト的 *fi:-* と区別することにする。

## 5. アスペクト的 *fi:-* の意味

チュニスのユダヤ人方言を記述した Cohen, D. (1975: 248) によれば、このアスペクト的 *fi:-* は①行為の継続性（進行性）、②行為の反復性、③行為の習慣性を表すという。意味に関しては後に詳細に検討するが、ひとまずこれに従う。①行為の継続性に関しては前掲の(2)、②行為の反復性に関しては(9)、③行為の習慣性に関しては(10)（未完形 *na:kəl* の前に置かれた *kunt* は存在の動詞 *kan* の完了形 1 人称単数形で、ここでは未完形を後続させて過去の未完了を表している）をご覧いただきたい。

(9) *hu:wa qa:fəð<sup>11</sup>* *yaðʕrab* *fi:-ya:*

彼 座る APSG.M 殴る IMPF.3SG.M FA-1SG

「彼はわたしを殴り続けている。」（反復）

<sup>10</sup> このように、人称辞を接尾された前置詞が文の主要部となって作られる前置詞句文については、熊切 (2009)、熊切 (2010a) を参照されたい。

<sup>11</sup> この例に現れる能動分詞 *qa:fəð* に関しては 7-1. で詳しく述べる。

(10) *kunt na:kəl fi:-ha:ʒa qbalma: nurqud.*  
 あるPERF.1SG 食べるIMPF.1SG FA-もの 前に 寝るIMPF.1SG

「わたしは寝る前に何か食べたものだ。」(習慣)

一方、これに対し、アスペクト的*fi:-*のない未完了形が表示するのは、(1)にみられるような「彼はクスクスを食べる(人なので、提供しても大丈夫)」という属性叙述、もしくは(4)にみられるような習慣性である。

## 6. アスペクト的*fi:-*の音形

アスペクト的*fi:-*は、場所的・イディオムの*fi:-*と音韻形態論的にまったく変わる点はない。母音の前では長母音*i:*が落ち、*f*となる。人称辞が接尾されたときの形式を次に挙げる(併せて、動詞に接尾される形式である対格人称接尾辞も括弧内に記す。なお、2人称単数と3人称男性単数にはそれぞれ2種の形式があるが、後のものは母音に接尾される場合の形式である)。

	単数	複数
1人称	<i>fi:-ya: (-ni:)</i>	<i>fi:-na: (-na:)</i>
2人称	<i>fi:-k (-ok/-k)</i>	<i>fi:-kum (-kum)</i>
3人称男性	<i>fi:-h (-u/-h)</i>	<i>fi:-hum (-hum)</i> (通性)
3人称女性	<i>fi:-ha: (-ha:)</i>	

## 7. アスペクト的*fi:-*の統語的特徴

ここではおもに統語的な観点からアスペクト的*fi:-*の現れる環境について記述する。

### 7-1. 未完了形との共起

アスペクト的*fi:-*と共起できる動詞形は未完了形のみである。完了形<sup>12</sup>(11)、命令形(12)とは共起できない<sup>13</sup>。

(11) *yhəzz f-əl-ka:s /həzz l-ka:s.*  
 持ち上げるIMPF.3SG.M FA-DEF-コップ /持ち上げるPERF.3SG.M DEF-コップ

<sup>12</sup> 伝統的なチュニス方言 (Singer 1988: 624)、タクルーナ方言 (Marçais et Guïga 1959: 3080)、モロッコ方言 (Harrell 2004:209) などでは完了形と共起する例が見られる。また、タクルーナ方言 (Marçais et Guïga 1959: 3082) には能助分詞との共起例もある。

<sup>13</sup> 未完了形はまた、願望や能力を表す動詞の後に置かれて動詞連続を作る。この場合にもアスペクト的*fi:-*は現れることはない。

*mnəggam naðʔrb-ək.*  
 ~できるIMPF.1SG 殴るIMPF.1SG-2SG

「私は君を殴ることができる」

\**mnəggam naðʔrb fi:-k.*

/\*hazz f-ol-ka:s.

「彼はコップを持ち上げている。／彼はコップを持ち上げた。／（非文<sup>14</sup>）」(12) hukk yodd-ək! /\*hukk fi-yodd-ək!  
搔く IMPR.2SG 手-2SG FA-手-2SG

「自分の手を搔きなさい!／（非文）」

能動分詞は性と数で活用し、行為の進行もしくは結果を表し<sup>15</sup>、アスペクト的fi-の表す継続性（進行性）とも重なりあう。しかしながら、この能動分詞(13)もまたアスペクト的fi-と共起することはない<sup>16</sup>。

nhəbb nufɾub qahwa \*nhəbb nufɾub fi-qahwa  
～したい IMPF.1SG 飲む IMPF.1SG コーヒー

「私はコーヒーが飲みたい」

nhəbb-ək tuɾub qahwa \*nhəbb-ək tuɾub fi-qahwa  
～したい IMPF.1SG-2SG 飲む IMPF.2SG コーヒー

「私は君にコーヒーを飲んでほしい」

この現象には、動詞のアスペクトのみならず、この言語における動詞の法体系も関わっており、本稿の議論の範囲を超えるため、本稿では扱わないものとする。

<sup>14</sup>すでに述べたように存在の動詞kanの完了形を未完了形の前に置くことで、過去の未完了を表すことができる。同様の手立てによって、継続性を表すアスペクト的fi-構文も過去にすることができる（つまり「～していた」）。後の例(17)を参照されたい。

<sup>15</sup> 進行を表す例：a:na: ma:fi: l-fransa.

私 行く AP.SG.M ~に-フランス 「私はフランスに行くところだ」

結果を表す例：a:na: ma:kəl.

私 食べる AP.SG.M 「私はもう食べた（満腹だ）／\*食べている」

また、能動分詞が分詞としてよりも名詞として用いられる場合も多い。ka:ɬəb 《作家（書く AP.SG.M）》, qa:ɬəl 《殺人者（殺す AP.SG.M）》, ma:kla 《食べ物（食べる AP.SG.F）》など。

<sup>16</sup>しかしながら、筆者の資料では直接目的語を取るJadd《掴む》が完了形と能動分詞でfi-を伴う例がある。

narɟaʃ nɟədd xdəmt-i: [II-90]  
帰る IMPF.1SG 掴む IMPF.1SG 仕事-1SG 「帰って仕事に就こう（文字通りには、自分の仕事を掴もう）。」ya:xi: ɟədd fi:-ya: ma:-səyyəb.  
結局 掴む.PRF.3SG.M F-1SG NEG-放す.PRF.3SG.M

「結局、彼は私を掴まえて、放さなかった。」

w-hu:wa ʃa:dədd fi:-ha:k-əl-lu:ha hatta: zra:q w-ʃə'a:m-u: 0əɟət [II-226]  
そして-彼 掴む AP.SG.M F-その-DEF-板 ~まで 青くなる.PRF.3SG.M そして-骨PL-彼 凍る.PRF.3SG.F

「そして（2日の間海に浸かりながら）彼はその板を掴み続け、ついには青ざめ、骨まで凍ってしまった。」

もしもこのfi-がアスペクトの用法ならば、非常に例外的といえるが、しかしこれは《掴む》などの手を用いる行為を表す動詞がイディオムのfi-を伴うことが多いという事実（例えばkabbəf fi: 《掴む》, ʃankəf fi: 《掴む》, sallam fi: 《手放す》）と関連づけて解釈することができるかもしれない。つまり、ɟəddが具体的に手で掴む場合にはイディオムのfi-を伴い、最初の例のように比喩的にチャンスなどを掴む場合には直接目的語を取る、という可能性も考えられるのである。

- (13) hu:wa mqałlɔq-ni.                    /\*hu:wa mqałlɔq fi:-ya.  
 彼    いらつかせるAP.SGM-1SG                    FA-1SG  
 「彼はわたしをいらつかせている。／（非文）」

また、未来を表す接頭辞ba:ʃを伴う未完了形(14)でもアスペクト的fi:-は用いることができず、さらに未来接頭辞がなくても未来を表す副詞があるだけでも不適格となる。

- (14) yudwa ba:ʃ ykarkɔb                    ɔz-zarbi:ya. /\*yudwa ba:ʃykarkɔb f-ɔz-zarbi:ya.  
 明日 FUT 巻く IMPF3SG.M DEF-絨毯                    FA-DEF-絨毯  
 /\*yudwa ykarkɔb f-ɔz-zarbi:ya.  
 「彼は明日絨毯を巻くだろう。／（非文）／（非文）」

とはいえ、アスペクト的fi:-構文が未来時制で用いることができないというわけではない。存在動詞kamの未完了形を未完了形の前に置けば、未来における継続を表すことが可能である。

- (15) i:ða:    timʃi:                    l-il-qahwa                    mʃa:-l-ʃaʃra,    hu:wa yku:n  
 もしも 行く IMPF2SG    ～～-DEF-喫茶店    ～に-DEF-10 彼    ある IMPF3SG.M  
 yuʃrub                    fi:-qahwa                    ya:di:.  
 飲む IMPF3SG.M FA-コーヒー    あそこで  
 「10時に喫茶店に行けば、彼はそこでコーヒーを飲んでいることでしょう」

一方、このアスペクト的fi:-がなければ常に非文となる構文がある。それは動詞qʃad《座る、留まる》の能動分詞qa:ʃɔd, qa:ʃda, qa:ʃdim（順に男性単数、女性単数、通性複数）に動詞未完了形が続き、「～し続けている、～している」という意味を表す構文である（熊切2009でこれを名詞文の一種である能動分詞文と分類した）。

- (16-a) hu:wa qa:ʃɔd                    ykarkɔb                    f-ɔz-zarbi:ya.  
 彼    ～しているSG.M 巻く IMPF3SG.M FA-DEF-絨毯  
 「彼は絨毯を巻いている。」

- (16-b) \*hu:wa qa:ʃɔd ykarkɔb ɔz-zarbi:ya.

リビア東部方言を扱うOwens (1984: 134)は、この構文とともに、動詞kam《ある》を用いた過去の継続を表す構文においても、アスペクト的fi:-が不可欠であることを記している。だが、チュニス方言では必ずしもそうではないようだ。

- (17) waqt illi:    ʒi:t,                    kumt                    na:kɔl                    (fi:-)sundwi:ʃfat.  
 時 関係詞 来る PERF.2SG ある PERF.1SG 食べる IMPF.1SG. (FA-)サンドイッチPL  
 「君がきたとき、私はサンドイッチをたくさん食べていたところだった。」



また、以下のように過去の習慣を表す場合でも、アスペクト的fi-はなくてもよい。

- (18) waqt illi: git, kunt di:ma na:kol (fi-)sundwi:tfat  
 時 関係詞 来るPERF.2SG あるPERF.1SG いつも 食べるIMPF.1SG (FA-)サンドイッチPL  
 「君がきたとき、私はいつもサンドイッチを食べていたものだった。」

## 7-2. 否定における特徴

この言語においては、動詞文（主要部に動詞がある文）の一般的な否定が動詞をma:-と-jで挟むことによって形成されるいっぽう(8), 名詞文（主要部に動詞を含まない文）はma:-と-jが人称辞を挟んだ形式（例：3人称単数男性はma:-hu:-j, 1人称単数はma:-ni:-j。なお、3人称単数男性形に由来するmu:jが、たいていの場合、すべての人称の形式に取って代わることができる）を否定される対象の前に置くことで形成される（詳しくは熊切2009参照）。アスペクト的fi-構文は、動詞文と見なすことができるにもかかわらず、名詞文と同じ否定形式を取る（(19)の例。Gibson 2009でも指摘あり）。

- (19) mu:j yalfbu: f-ol-kura. /\*ma:-yalfbu:-j f-ol-kura.  
 NEG 遊ぶIMPF.3SG.M FA-DEF-ボール  
 「彼らはサッカーしていません。」

いっぽう、一般的な否定を形成するma:-と-jのうち後者が現れない否定形式「なにも～ない（あるいは、だれも～ない）」(20), あるいは「～しかない」(21)では、アスペクト的fi-構文は(22)と(23)のように動詞文と同じ形式となる。

- (20) ma:-kli:t hatta: fay.  
 NEG-食べるPERF.1SG ～すら なにも  
 「わたしはなんにも食べなかった。」
- (21) fə-sʰəbɑ:h ma:-kli:t ka:n xubz.  
 FL-DEF-朝 NEG-食べるPERF.1SG ～だけ パン  
 「私はパンしか食べなかった。」
- (22) ma:-naʃmɔl fi:-hatta: fay.  
 NEG-するIMPF.1SG FA-～すら なにも  
 「わたしはなんにもしていない。」
- (23) ma:-yakol ka:n f-ol-kuskɔsɔ:  
 NEG-食べるIMPF.3SG.M ～だけ FA-DEF-クスクス  
 「彼はクスクスだけを食べて続けている。」

否定を作る後部要素-*j*のない(22)を、(24)のように普通のアスペクト的*fi-*を用いた文の否定のように*ma-*と-*j*が人称辞を挟んだ形式で否定することも可能であるが、どちらかといえば、(22)のほうが普通のようなのである。

(24) *ma:-ni:-j*      *naʕməl fi:-hatta: ʃay.*  
NEG-1SG-NEG

ここで、能動分詞*qa:ʕəd*が未完了形の前に置かれる場合をみると、すでに述べたようにこの構文は名詞文の一種と見なせるため、アスペクト的*fi-*があろうとなかろうと名詞文と同じ否定形式が適用される((25)はアスペクト的*fi-*がない例)。

(25) *ka:n xōit*      *oʕ-ʔayyara ha:ðika, ʔa:-k*      *ma:-k-ʃ*  
もしも 取る PERF2SG DEF-飛行機 あの モダリティ辞<sup>17</sup>-2SG NEG-2SG-NEG

*qa:ʕəd*      *tahki:*      *mʕa:-ya.*  
～している AP.SGM 語る IMPF2SG ～と-1SG

「あの飛行機に乗っていたら、あなたは私と話してはいないだろう。」

(26) *lu:wa mu:ʃ*      *qa:ʕəd*      *yaʕməl*      *fi:-h*      *min*      *ʔa:s-u*[II-295]  
彼 NEG.3SG.M ～している AP.SG.M する IMPF3SG.M FA-3SG.M ～から 頭-3SG.M

「彼は自分の考えでそれをしているのではない。」

-*j*が現れない否定形式(ここでは「だれにも～ない」)では、アスペクト的*fi-*を含む文は次の3つの構文が可能だという。

(27) *mu:ʃ*      *qa:ʕəd*      *ykaʕləm*      *fi:-hatta: had.*  
NEG.3SG.M ～している AP.SG.M ～に話す IMPF3SG.M FA-～すら 誰にも

「彼は誰にも(電話で)話してはいない。」

(28) *ma:-qa:ʕəd*      *ykaʕləm fi:-hatta: had.*  
NEG-～している AP.SGM

(29) *qa:ʕəd ma:-ykaʕləm*      *fi:-hatta: had.*  
NEG-～に話す IMPF3SG.M

なお否定に関連して付け加えれば、《もう～しない》という表現は*ma:-ʕa:d-ʃ*(ただし*ʕa:d*は活用する)を動詞の前に置くことで作られるが、これはアスペクト的*fi-*とは共起しない<sup>18</sup>。

<sup>17</sup> 条件文の主節に現れるこのモダリティ辞については熊切(2010b, 2011b)を参照されたい。

<sup>18</sup> ただし《～しかない》という表現で、*ma:-ʕa:d-ʃ*の否定後部要素-*j*が現れない場合はその限りではない。

*w-i:ða:bi:h*      *ma:-ʕa:d*      *yʃu:ʔ*      *illa: fi:-ðʕʔa:m*[II-106]  
そして-急に もう～しない 3SG.M 見る IMPF3SG.M ～しか FA-DEF-暗闇

「すると急に暗闇しか見えなくなった」

- (30) \*ma:-fadf-f            na:kol            f-il-xubz.  
 もう～しない1SG 食べるIMPF.1SG FA-DEF-パン

### 7-3. 動詞との結びつき

Aspect的fi:-は動詞のAspectに関わるが、統語的に動詞に格別強く結合しているわけではなく、通常の前置詞と同じように疑問詞と結合して文頭に現れたり(31, 32)、動詞を省略されて現れたり(32)、動詞との間に疑問標識、前置詞句を介入させたり(33, 34)することができる。なお、(31)と(34)ではAspect的fi:-が場所的fi:-と共存している。

- (31) f-a:jkun tkallam            tawwa f-ot-ta:li:fon?  
 FA-誰 話すIMPF.2SG 今 FL-DEF-電話

「今電話で誰に話をしているの？」

- (32) A: f-a:f (qa:fod)            ta:kol?            B: (na:kol)            fi:-kusksi.  
 FA-何 (～しているSGM) 食べるIMPF.2SG (食べるIMPF.1SG) FA-クスクス

A: 「なに食べてるの？」 B: 「クスクス (食べてる)。」

- (33) yalʃab-fi:            f-ol-ku:ra?  
 遊ぶIMPF.3SG.M-疑問標識 FA-DEF-ボール

「彼はサッカーしている？」

- (34) mujrub            f-ol-qahwa            fi:-fwayya tary.  
 飲むIMPF.1SG FL-DEF-喫茶店 FA-少量-お茶

「わたしは喫茶店でお茶を少し飲んでいます。」

また、直接目的語を並べる場合には、Aspect的fi:-を伴う目的語が接続詞によって並列される場合 ((35)のはじめの2つのAspect的fi:-) もあれば、そうではない場合もある ((36)<sup>19</sup>と(38))。

- (35) w-ymaʃfi:            fi:-ha:k-l-qwa:ʃol            w-fi:-ha:k-f-ʃqu:fat  
 そして-行かせるIMPF.3SG.M FA-その-DEF-キャラバンPL そして-FA-その-DEF-船PL

- w-yu:səq            fi:-sləʃ    w-yʒi:b            fi:-sləʃ [II-162]  
 そして-輸出するIMPF.3SG.M FA-商品 そして-持つてくるIMPF.3SG.M FA-商品

「そして、彼はキャラバンと輸送船を絶えず送り出し、商品を輸出したり、輸入したりしている。」

- (36) kull barr ha:fif            fi:-h            malək yahkum            b-ism-u:  
 すべて 土地 置くAPSG.M FL-3SG.M 王SG 治めるIMPF.3SG.M ～で-名前-3SG.M

<sup>19</sup>ただし、この場合は慣用的に「ジズヤとハラージュ」と常に並べられて用いられているためかもしれない。(38)についても同様の事情が考えられる。

w-yadfaʃ-lu: fi-ʒ-ʒəzɣa w-l-xara:ʒ [II-203]  
 そして-払うIMPF3SG.M 彼に FA-DEF-ジズヤ そして-DEF-ハラージュ

「すべての土地に彼（スルタン）は王を置き、その王は彼の名前で支配し、彼にジズヤとハラージュ（ともに税の名前）を払っている。」

また、2重に目的語を取ることでできる動詞ʃfa:《与える》ではこのアスペクト的fi:-が両方に現れることもある（ただし、この動詞においては、与えられるモノが直接目的語、受け手は前置詞l-で示されることもあり、その場合にはこのl-がアスペクト的fi:-に交代したとも考えられる。次節を参照のこと）。

(37) hatta: min ʃix əl-mɔ:na kan yaʃfi: fi:-hum  
 ～までも 長 DEF-メディーナ あるPERF3SG.M 与えるIMPF3SG.M FA-3PL

f-is-smi:d [II-189]  
 FA-DEF-セモリナ

「（あまりにも景気が悪いので）メディーナの長までもが彼ら（職人たち）にセモリナを与えていた。」

#### 7.4. 他の前置詞と交替するアスペクト的fi:-

動詞と組になって用いられる前置詞l-《～に》やʃla:-《～の上で》がアスペクト的fi:-と交替することがある。

《～に（前置詞l-）～を（直接目的語）教える》という構造を持つʃallamでは、2重のアスペクト的fi:-が見られる。

(38) w-ʃix qa:ʃəd f-il-mahrəs yʃallam f-ən-na:s  
 そして-長 座るAP.SGM FL-DEF-ハンマームの休憩所 教えるIMPF3SG.M FA-DEF-人々

f-əl-wəʃu: w-sʃ-ʃla:t [II-294]  
 FA-DEF-沐浴 そして-DEF-礼拝

「長はハンマームの休憩所に座って、人々に沐浴と礼拝を教えている。」

また、動詞ʃarkəsはつねに前置詞ʃla:-を伴って《～を探す》という意味で用いられる(39)が、このʃla:-がアスペクト的fi:-と交代する場合がある（Marçais et Guïga 1959: 3081でも同様の例が挙げられている）。

(39) ʃarkəs ʃla:-sti:lo:-ya: f-odʃ-dʃar əlkull.  
 探すPERF.1SG ～の上で-ペン-1SG FA-DEF-家 全部

「私は自分のペンを家中探しまわった。」

- (40) qa:fəð            nfarkəs            fi:-sti:ro:  
 ～しているSG.M 探すIMPF.1SG FA-ペン

「わたしはペンを探しています。」

しかし、上記の例を除いて前置詞がアスペクト的fi:-に変わる例は、あまりないようだ<sup>20</sup>。

#### 7.5. イディオムのfi:-

動詞と組になって用いられるイディオムのfi:-とアスペクト的fi:-との違いは、①後者が完了形とともに用いられないのに対して、イディオムのfi:-は完了形でも変わらずに現れること、②否定形式が異なることである。例えば、前置詞fi:-とペアで《～に感嘆する》という意味を表す動詞fagğabは、完了形でもfi:-が現れ(41)、また未完形でも通常通り動詞文の否定が適用される(42)。

- (41) fagğabt            fi:-h.  
 感嘆するPERF.1SG FI-3SG.M

「私は彼に感嘆した。」

- (42) mā:-nəfagğab-ʃ            fi:-h.  
 NEG-感嘆するIMPF.1SG-NEG FI-3SG.M

「わたしは彼に驚かない。」

さて、動詞qa:l《言う》は「qa:l+fi:-人+klam (kəlmə《言葉》の複数形)」で《～について否定的なことを言う、陰口をたたく》という意味になるが(43)、これにアスペクト的fi:-が用いられると、イディオムのfi:-との共存が生じる。(44)ではこれにさらに場所的fi:-も加わっており、すなわち3種のfi:-が同時に出現していることになる。

- (43) anti    qult            fi:-ya:    klam.  
 あなた 言うPERF.2SG FI-1SG 言葉

「あなたはわたしの陰口をたたいた。」

- (44) hu:wa    yqu:l            fi:-ya:    f-oklam    f-ol-qahwa.  
 彼 言うIMPF.3SG.M FI-1SG FA-言葉 FL-DEF-喫茶店

「彼は喫茶店でわたしの陰口を叩いている。」

なお、(44)はまた動詞とアスペクト的fi:-との間に別要素が介入している例のひとつでもある((33), (34)を参照)。

動詞fakkərは直接目的語を取ると《思い出させる》、イディオムのfi:-を伴うと《～のことを考える》という意味になる。したがって、未完形でfi:-が用いられている場合、アスペクト的

<sup>20</sup> 調べた限りでは他にlawwəg ʃla:《～を探す》があるが、アスペクト的fi:-の容認度は低いようだ。

fi:-とイディオムのfi:-のどちらにも解釈できることになる(45)。もつとも、通常は文脈から推測できる。

(45) nfakker fi:-k

IMPF.1SG FI/FA-2SG

「(イディオムのfi:-で解釈) わたしはあなたのことを考える。 / (アスペクト的fi:-で解釈) わたしはあなたに思い出させている。」

最後に、ある構文ではイディオムのfi:-とともに現れる要素が、別の構文では直接目的語として現れ、アスペクト的fi:-をとるという若干複雑な例を挙げる。

動詞sraq《盗む》は「sraq+所有者+fi:-モノ」で《(所有者)から(モノ)を盗む》となるが、これにアスペクト的fi:-を適用すると(46)のように所有者に付く。ただし、この場合、「今盗んでいる」という解釈は不自然なものとなり、習慣として理解される。

(46) hu:wa (di:ma) yəsraq fi:-ya: fəl-flus.

彼 (いつも) 盗むIMPF.3SG.M FA-1SG FI-DEF-金

「彼は(いつも)わたしから金を盗んでいる。」

しかしいっぽう「sraq+1-所有者+モノ-所有者」《(所有者)から(モノ)を盗む》という構文もあり、その場合、アスペクト的fi:-が付くのはモノのほうとなる(47)。

(47) hu:wa yasraq-l-i: fi:-flus-i:.

彼 盗むIMPF.3SG.M-私から FA-金-1SG

「彼は(いつも)わたしから金を盗んでいる。」

## 8. アスペクト的fi:-の意味的特徴

アスペクト的fi:-の意味に関しては、すでに先行研究をもとに①行為の持続性(進行性)、②行為の反復性、③行為の習慣性を表すと概観したが、本節ではもう少し詳しく見てみたい。

だがその前に、前節を踏まえて、アスペクト的fi:-について統語的には次のように定義する。

①常に未完了形とのみ現れる。

②アスペクト的fi:-が含まれる文の否定は通常の動詞文とは異なり、名詞文の否定形式を取る。

すなわち、本稿では上記の定義に合致するもののみアスペクト的fi:-と見なし、それ以外のも

のは以下の議論では扱わない<sup>21</sup>。

## 8-1. 動詞の意味との関係

ここではAspect的fi:-と動詞の意味との関係について検討する。

### 8-1-1. 継続相と習慣相を表す場合

xzar 〈～を見る〉, ja:f 〈～を見る〉, smaf 〈～を聞く〉, ʕallom 〈～を教える〉, yaff 〈～に怒る〉, amman 〈～を信頼する〉, sʕaddoq 〈～を信頼する〉といった持続性のある行為, hakk 〈～を搔く〉, qa:l fi:+人 klam 〈～の陰口を叩く〉, ʕʕabhok 〈～を笑わせる〉, qlab 〈騙す〉といった, 類似した行為の集合からなる集積的な行為, farkos ʕla: 〈～を探す〉, bna: 〈～を建てる〉, ʕabba: 〈～を満たす〉, qasʕsʕ 〈～を横切る〉などの完結性のある行為 (telic) は, Aspect的fi:-とともに用いられると, その行為がまさに行われているという継続相<sup>22</sup> (進行・持続) か, 習慣相 (Comrie 1976: 27-28の定義に従う<sup>23</sup>) のどちらかを表す。

(48) xu:-ya! tuɣzur fi:-ya? sa:q-i: tu:ɣaʕ w-onti sa:kot  
兄弟-1SG 見るIMPF2SG FA-1SG 足-1SG 痛むIMPF3SGF そして-あなた 黙るAP.SGM

「おい！ 俺を見てるか？ 俺の足が痛むのに、あんたは黙ってる。」 (継続)

(49) muɣzur fi:-k kullyu:m tʕʕadda: mən-hu:ni:  
見るIMPF.1SG FA-2SG 毎日 通るIMPF2SG ～から-ここ

「君がここを通るのを毎日見ている。」 (習慣)

(50) hu:wa qa:ʕəd yaqləb fi:-ya:  
彼 ～しているAP.SGM 騙すIMPF3SG.M FA-1SG

「彼は私を騙し続けている。」 (継続)

(51) di:ma hu:wa yaqləb fi:-ya:  
いつも 彼 騙すIMPF3SG.M FA-1SG

「彼はいつも私を騙す。」 (習慣)

<sup>21</sup> 例えば, Marçais et Guiga (1959: 3080)は完了形とAspect的fi:-の共起する例も含めているが, 筆者はチュニス方言におけるそうした例の少なさから, これを別の現象, もしくはAspect的fi:-の非常に周辺的な例として理解すべきだと考えている (なお, 注16も参照されたい)。また, 使役動詞における被使役者にとっての動作対象標識として用いられるfi:-も, ここでの定義上除外される。

ma:-ɣayyabt-ni:-ʕ fi:-l-kta:b 「あなたは私にその本を持ってこさせなかった。」  
NEG-持ってこさせるPERF.2SG-1SG-NEG F-DEF-本

<sup>22</sup> 動作的動詞についていわれるのが進行相 (progressive), さらにこれに状態動詞の進行・継続相を含めたものを継続相 (continuous) とするBybee et al. (1994: 126-127)の定義に従う。少なくともAspect的fi:-との関連においては, この2つを厳密に区別する必要はないように思われるからである。

<sup>23</sup> [Habituals] describe a situation which is characteristic of an extended period of time, so extended in fact that the situation referred to is viewed not as an incidental property of the moment but, precisely, as a characteristic feature of a whole period. (Comrie [1976: 27-28])

(52) hu:wa yqalləq fi:-ya.  
 彼 悩ますIMPF.3SG.M FA-1SG

「彼は私を悩ませている。」(継続)

(53) hu:wa ka:n yqalləq fi:-ya.  
 彼 あるPERF.3SG.M 悩ますIMPF.3SG.M FA-1SG

「彼は私を悩ませたものだ。」(習慣, 文脈次第では継続)

(54) qa:fəd yyuʃ fi:-ha.  
 ~しているAP.SG.M 怒るIMPF.3SG.M FA-3SG.F

「彼は彼女に怒っている。」(継続)

(55) hu:wa di:ma yyuʃ fi:-ha.  
 彼 いつも 怒るIMPF.3SG.M FA-3SG.F

「彼は彼女にいつも怒っている。」(習慣)

(56) qa:fəd nfarkəs fi:-sti:ro:.  
 ~しているAP.SG.M 探すIMPF.3SG.M FA-ペン

「私はペンを探している。」(継続)

(57) hu:wa di:ma yfarkəs fi:-stu:f-i: (yhəbb  
 彼 いつも 探すIMPF.3SG.M FA-財布-1SG(～したいIMPF.3SG.M

ysərq-u:!).

盗むIMPF.3SG.M-3SG.M

「彼はいつも私の財布を探している(盗むつもりだ!)。」(習慣)

(58) hu:wa yfayyəb f-əl-kuskisi:.  
 彼 料理するIMPF.3SG.M FA-DEF-クスクス

「彼はクスクスを料理しているところだ。」(継続)

(59) di:ma hu:wa yfayyəb f-əl-kuskisi:.  
 いつも 彼 料理するIMPF.3SG.M FA-DEF-クスクス

「彼はいつもクスクスを作っている。」(習慣)

その行為に完結性があるかどうか, つまりtelicかatelicかどうかは, アスペクト的fi:-との関連においては意味の違いにあまり関与していないようである。

### 8-1-2. 反復相と習慣相を表す場合

瞬間的な行為や短時間で対象に変化を与える行為を表す動詞がアスペクト的fi:-とともに用いられると, その行為が現在反復しているという反復相 (Bybee et al. 1994: 127の定義に従う<sup>24</sup>)か, 習慣相かのどちらかを表す。

<sup>24</sup> Iterative describes an event that is repeated on a particular occasion. (Bybee et al. 1994: 127)



- (60) b'a:b'a yað'rab fi:-ya.  
 父 叩く IMPF.3SG.M FA-1SG  
 「父は私を何度も殴り続けている。」 (反復)
- (61) b'a:b'a di:ma yað'rab fi:-ya.  
 父 いつも 叩く IMPF.3SG.M FA-1SG  
 「父はいつも私を殴る。」 (習慣)
- (62) hu:wa yafɣaf fi: fari:da.  
 彼 驚かす IMPF.3SG.M FA- (人名)  
 「彼はファリーダを何度もびっくりさせている。」 (反復)
- (63) hu:wa di:ma yafɣaf fi: fari:da.  
 彼 いつも 驚かす IMPF.3SG.M FA- (人名)  
 「彼はいつもファリーダをびっくりさせる。」 (習慣)
- (64) qa:fəd yduqq fə-l-ba:b.  
 ～している AP.SG.M 叩く IMPF.3SG.M FA-DEF-ドア  
 「彼はドアをノックしている。」 (反復)
- (65) kullyum yduqq fə-l-ba:b.  
 毎日 叩く IMPF.3SG.M FA-DEF-ドア  
 「毎日彼はドアをノックする。」 (習慣)

### 8-1-3. 習慣相のみを表す場合

瞬間的な行為を表す動詞であっても習慣相以外は表しにくい場合がある。これは、その行為が短時間に何度も起こるようなものではなく、反復されるためにはある程度の時間の幅が必要となるため、結果としてある行為をその時間の幅を特徴づけるものとして見なす習慣相

(Comrie 1976: 27-28) と変わらなくなってしまうからであると考えられる。例えば「ある特定の人にお金を与える」という行為は、矢継ぎ早に反復されるというよりも、ある程度の間隔をもって繰り返されることのほうが想定しやすい。そのため「何度も (反復して) お金を与えている」という反復的事態は一定の時間の幅の内部に位置づけられることとなり、「このところ習慣的にお金を与えている」という一定の時間の幅における習慣的事態とさほど変わらなくなってしまうのである。

- (66) qa:fəd yaɣfi: fi:-ha fi:-flu:s.  
 ～している AP.SG.M 与える IMPF.3SG.M FA-3SG.F FA-お金  
 「彼は (このところ) 彼女にお金を与えている。」 (習慣)

また、継続や反復が想定しにくい場合にも、習慣相以外の解釈が取られることはない。例えば、(46)のような場合、「彼が私のお金を私から (今、目の前で) 盗みつつある」というあ

りそうにない継続相的解釈よりも習慣相で解釈されるのが普通である。

動作主の意志の関与については後に論じるが、行為そのもの (lqa: 《見つける》) や、行為の過程 (sayyob 《手放す》) を話者がコントロールできない場合にも、継続相や反復相での解釈は難しいようだ。

(67) di:ma nalqa: f-ol-flu:s hu:ni.  
いつも 見つけるIMPF.1SG FA-DEF-金 ここ

「私はいつもここでお金を見つけてる。」 (習慣)

(68) \*qa:fəd yalqa: fi:-sti:lo:.  
～しているAP.SG.M 見つけるIMPF3SG.M FA-ペン

「(非文) 彼は今ペンを見つけてつつある。」

(69) ysayyob f-d-dabbu:za.  
手放すIMPF3SG.M FA-DEF-瓶

「彼はいつも瓶を手から落とす。」 (習慣。彼は瓶を手から落としている、という継続相の解釈は困難)

#### 8-1-4. 遅延・誇張

8-1-2.と8-1-3.で、瞬間的な行為に関してはアスペクト的fi:-が用いられた場合に継続相で解釈されることはないとしたが、あえてそのように解釈する場合には、その行為が通常より長い時間を掛けて行われているという遅延の印象、手間取ったり、もたもたしたり、ぐずぐずしている印象を伴う<sup>25</sup>。

(70) hu:wa ywaqqaf fi:-kərhabt<sup>26</sup>u:.  
彼 停めるIMPF3SG.M FA-車-3SG.M

「彼は車を停めている (もたもたして停車する印象) 。」 (継続)

(71) qa:fəd yəʒbəd fi:-stu:f-u: mən-maktu:b-u:.  
～しているAP.SG.M 引き出すIMPF3SG.M FA-財布-3SG.M ～から-ポケット-3SG.M

「彼はポケットから財布を取り出している (取り出すのに手間取っている印象) 。」 (継続)

(72) yxabbi: fi:-stu:f-u: baʃʃwayya, baʃʃwayya.  
隠すIMPF3SG.M FA-財布-3SG.M ゆっくり ゆっくり

「ゆっくりゆっくり彼は財布を仕舞っている。」 (継続)

<sup>25</sup> Cohen, D. (1963: 216)は、モーリタニアのハッサーニーヤ方言では、v- (<アスペクト的fi:-) が習慣、反復に加えて行為の延長 (prolongation de l'action) を表すと述べている。また、マルタ語にはこのアスペクト的fi:-は存在しないが、Aquilina (1987: 333)は前置詞fiについて次のような用法もあると述べる。

With used after certain verbs to convey the idea of messing about or tampering with s.th.

<sup>26</sup> 語根KHRBから。

このような遅延という表現性から、さらにその行為を大げさなものとして印象づける誇張的な表現性が生まれる<sup>27</sup>。

(73) hu:wa qa:fəd yumyuð fi:-lhəm.  
彼 ~しているAP.SG.M 噛むIMPF.3SG.M FA-肉

「彼は肉を噛んでいる（肉がとても固くて噛み切れない、あるいは肉を口いっぱい頬張ってモグモグしている印象）。」（継続）

(74) ana: qa:fəd nbəll fi:-ri:q-i: akahaw.  
私 ~しているAP.SG.M 湿らすIMPF.1SG FA-唾-1SG それだけ

「（自分の酒豪ぶりを誇示して）俺は口を湿らせている、それだけさ。」（継続）

(75) ha:w tabʕaθ fi:-ya: nuxʔub (fi:-lahma akbar min fumm-ək),  
ほれ 送るIMPF.2SG FA-1SG 求婚するIMPF.1SG FI-肉 大きい ~より 口-2SG

ya:xi: ha:w həsbət-ni: fa:lba w-ʕfat-ni: ʕajfi:n frank [II-115]  
結局 ほれ 思うPERF.3SG.F-1SG 物乞い そして-与えるPERF.3SG.F-1SG 20 フランク

「ほれ、（お前のために母親である）私が（お前の口より大きな肉に [=身分違いの家柄の娘に]）求婚するように、お前は私をしつこく送り出してるが、結局はほれ、彼女はほれ、彼女（娘の母親）、私を物乞いだと思って、20 フランクくれおった。」（継続）

#### 8-1-5. 痛みや痒みを表す動詞

アスペクト的fi:-は、痛みや痒みを表す動詞とともに継続相でよく用いられる。

(76) rʕa:s-i: ya:kəl fi:-ya:  
頭-1SG 食べるIMPF.3SG.M FA-1SG

「頭が痒い。」（継続）

(77) si:n-i: taħraq fi:-ya:  
目-1SG 焼けるIMPF.3SG.F FA-1SG

「目がヒリヒリ痛い。」（継続）

(78) rʕa:s-i: yu:ʕaʕ fi:-ya:  
頭-1SG 痛むIMPF.3SG.M FA-1SG

「頭が痛い。」（継続）

この痛みを表す動詞wʕaʕについて、アスペクト的fi:-のつくものとなないものとは次のような違いがあるという。

<sup>27</sup> モロッコ方言を扱う Harrell et Sobelman (1966: 32)には、fi:-の用法のひとつとして「過剰と持続を意味する (to denote excess, persistence)」とある。また、英語の進行形のemotiveな用法も参照のこと (Comrie 1976: 37)

(79) rfa:s-i: di:ma yu:ʒaf fi:-ya.  
頭-1SG いつも 痛むIMPF3SG.M FA-1SG

「いつも頭が痛い (毎回ある程度の長さを持った痛みが習慣的に起きる)。」 (習慣)

(80) rfa:s-i: di:ma yu:ʒaf-ni.  
頭-1SG いつも 痛むIMPF3SG.M-1SG

「いつも頭が痛い (瞬間的な痛みが習慣的に起きる)。」 (習慣)

wʒafはそもそも瞬間的な痛みを表す動詞であると考えられるが、これにアスペクト的fi-が使われる場合には、他の瞬間的な行為の動詞のように単なる習慣相ではなく、痛みが起きる時間の延長とともに習慣相が表される点で特徴的である。

#### 8-1-6. アスペクト的fi:-と共起できない動詞

habb《愛する》といった状態動詞, あるいはʒaf《知る》, tʒarʒf《知り合いになる》, baʃʃal《止める》など、一度ある状態に達したらその状態を取り消すことができないような意味を持つ動詞はアスペクト的fi:-と共起できないようである。

ただし、同じ《止める》でも、《一時的に止める》が含意されるwaqqafはアスペクト的fi:-を伴うことができる。

(81) ywaqqaf fi:-duxxa:n.  
止めるIMPF3SG.M FA-タバコ

「タバコを一時的に止めている。」 (継続)

(82) \*hu:wa ybaʃʃal fi: duxxa:n

また、動詞 xallaには《～に～させる、～に～することを許す》という使役・許可の意味と《～残す》という通常の動詞的意味の2種があるが、このうち使役・許可的意味ではアスペクト的fi:-は使えない。

(83) ʃla:ʃ txalli: fi:-ya: hu:mi:ʔ  
どうして 残すIMPF2SG FA-1SG ここ

「どうして私をここに置き去りにしたまますの?。」 (継続)

(84) \*txalli: fi:-ya: boʃ murqud.  
～させるIMPF2SG FA-1SG ～するために 寝るIMPF.1SG

「(非文) あなたは私を寝かそうとしている」

#### 8-1-7. 動作主の意志の関与

8-1-3.で、行為そのものや、行為の過程に話者の意志が反映できない場合に、継続相や反復

相では解釈しにくくなることを指摘したが、これ以外にも、動作主の意志がAspect的fi-の意味に関与していると見られる例がある<sup>28</sup>。

- (85) ?karhba taɔrab                      fi:-ya:  
 車  殴る IMPF.3SG.F  FA-1SG

交通事故の表現として(85)が話者にとっておかしく感じられるのは、これが「車が私を轢いている」ではなく、あたかも「車が繰り返し私にぶつかっている」ような事態を意味しているからである。すなわち、意図して害を与えようとしてぶつかっているという意志性が、「車が私を轢く」という事態の偶発性にそぐわないといえる。

また、(16-a)の例には「本来ならばする必要もないのにわざわざ時間をかけて絨毯を巻いている、どうしてだろう」という話者のいぶかしむ気持ちも加味されているという。これも、Aspect的fi-が動作主の意志をより強く表出するからであろう。

さらにfham《理解する》はAspect的fi-とともに用いることができるが、1人称以外では容認度が落ちるようである。これは、話者が自分の意志では制御できない他者の認識活動を表現することに無理を感じているからかもしれない<sup>29</sup>。

- (86) a:na: nɔfham                      fi:-k.  
 私  理解する IMPF.1SG  FA-2SG

「わたしはあなたを理解しつつある。」

- (87) ?hu:wa yɔfham                      fi:-k.  
 彼  理解する IMPF.3SG.M  FA-2SG

## 8-2. 名詞との関係

前節ではAspect的fi-と動詞の意味との関係を見てきたが、この前置詞によって動詞と結びつけられる名詞の性質や数がAspect的fi-構文の意味に影響を与えることもある。例えば、動詞kassar《～を壊す》の場合、自動車などのように時間をかけて壊すことができるものは継続相にすることができるが、コップのように一瞬で壊れるものの場合にはそうできない。

- (88) qa:fɔd                      ykassar                      fi:-karhba.  
 ～している AP.SG.M  壊す IMPF.3SG.M  FA-車

「彼は車を壊している。」（継続）

<sup>28</sup> Bybee et al. (1994: 136)では進行相におけるactive involvement of an agentが指摘されている。

<sup>29</sup> なお、進行中の出来事を話者が目の前で見ていようかどうかという事態の事実性(factuality)が関与しているかどうかについては、はっきりとした例を得ることができなかった。ただし、他方言の報告(Holes [1995: 180-181])を見る限り、可能性がないとはいえない。

- (89) \*ykassər                      fi:-ka:s.  
壊すIMPF.3SG.M FA-コップ

「(非文) コップを割っている。」(継続)

次の(90)でも、3人称単数女性接辞が、言語などを指すのではなく、人(この場合は「彼女」)を意味する場合は継続相では表せない。これはもちろん、言語などはその部分を忘れるということもありうるが、人に関してはそのような事態は成り立たないからである。

- (90) qa:fəd                      nansa:                      fi:-ha.  
～しているAP.SG.M 忘れるIMPF.3SG.M FA-3SG.F

「わたしはそれ(フランス語)を少しずつ忘れていく。」(継続)

また、アスペクト的fi:-後の名詞が単数か複数かで文の意味が異なる場合がある。

- (91) hu:wa yhamməl                      fi:-fa:li:za.  
彼 運ぶIMPF.3SG.M FA-荷物SG

「彼はひとつの荷物を(苦労して)運ぼうとしている。」(継続)

- (92) hu:wa yhamməl                      fi:-fa:li:za:t.  
彼 運ぶIMPF.3SG.M FA-荷物PL

「彼はたくさんの荷物を次々と運んでいる。」(継続)

名詞の修飾語が、アスペクト的fi:-との共起に影響を与えることもある。(94)が非文となるのは、修飾語のlkull/ka:m̄la《全部、丸ごと》が、アスペクト的fi:-の未完了性と矛盾するからであろう。

- (93) tawwa na:kəl                      fi:-fqa:la kusksi:                      wahd-i.  
今 食べるIMPF.1SG FA-大皿 クスクスひとりで-1SG

「わたしは今ひとりで大皿のクスクスを食べています」

- (94) \*na:kəl fi: fqa:it əl-kusksi: lkull/ka:m̄la.

同様の理由から(95)も非文となるが、kta:b《本》を複数形にすると適格となる。

- (95) \*naqra: f-il-kta:b ha:ða: lkull

- (96) naqra:                      f-il-ktub                      ha:ðu:ma lkull  
読むIMPF.1SG FA-DEF-本PL これら 全部

「わたし、これらの本を今全部読んでいるところ(乱雑に置いてある本を片付けようとする人に対して、片付けないでほしいということを伝えようとする、という状況で)。」

これは、複数形の $ktub$ を修飾する $lkull$ が一冊の本の全体性よりも本の複数性を強調するようになったため、アスペクト的 $\bar{f}$ -の未完了性に抵触しなくなったためであると考えられる。

なお、主語が単数であるか複数であるかによって、文意に影響が出る例は今のところ筆者の資料にはない。

### 8-3. アスペクト的 $\bar{f}$ -の意味再考

上述のように、アスペクト的 $\bar{f}$ -の意味は、①継続相、②習慣相、③反復相、④延長と誇張の4つに分けることができる。

このうち④延長と誇張は、①継続相と③反復相を前提とした二次的な用法であり、アスペクト的 $\bar{f}$ -の基本的な意味とみなすことはできない。

また、継続相と反復相の関係について考えてみると、この違いはアスペクト的 $\bar{f}$ -固有の違いというよりも、動詞の性質（瞬間的行為かどうか）に基づくものと考えられる。すなわち、継続相と反復相の違いは単に現れ方だけのものであり、アスペクト的 $\bar{f}$ -としては本質的には同じ意味から生まれたものとみなせる（ただしこの「同じ意味」がいかなるものなのかについては本稿では論じない）。そこで、両者を合わせたものを継続反復相と呼ぶことにしよう。

すると、アスペクト的 $\bar{f}$ -の基本的な意味は継続反復相と習慣相の2つのアスペクトにまとめることができることになる。

そこで、次に問題にすべきは、この両者のうちどちらがより根本的な意味か、ということである。

すでに本稿で挙げた多くの例で示されているように、アスペクト的 $\bar{f}$ -が習慣相で用いられるとき、そのほとんどが $di:ma$ 《いつも》、 $kullyum$ 《毎日》などの習慣を表す副詞（句）と共に起している。あるいは、(10)のように存在の動詞の完了形と副詞節（ $qbalma: nurqud$ 「寝る前に」）とで過去の習慣を表しているかである（ただし、文脈次第で継続相も習慣相も意味する(53)は除く）。そして、副詞的要素なしに習慣相が表される場合は、そもそも動詞の意味からして習慣相以外の解釈ができない場合に限られている(46, 47, 69)。

一方、継続反復相の場合はこれとは異なる。能動分詞である $qa:fad$ が前に置かれる例は多いものの、それを上回る数が $qa:fad$ も副詞的要素もなしでそのまま継続反復相を表しうるのである。

アスペクト的 $\bar{f}$ -構文における $qa:fad$ の役割については別に考える必要があるにしても、少なくとも、継続反復相と習慣相を比べた場合、アスペクト的 $\bar{f}$ -構文においてもっとも基本的な意味が継続反復相であることは確かであろう。

すなわち、アスペクト的 $\bar{f}$ -構文とは、そもそも継続反復相を表す形式であり、この継続反復相に必要な応じて副詞句や副詞節が与えられることで習慣相というアスペクトが生じていると

考えられるのである<sup>30</sup>。

### 9. アスペクト的*fi-*の位置づけ

アスペクト的*fi-*の統語的・意味的な特徴をこれまで概観してきたが、ここではこれらの諸特徴を踏まえて、この前置詞がいかなる要素なのかについて考察する。

まず、意味的にはこのアスペクト的*fi-*が動詞未完了形に密接に関わることは明らかであるが、それでもなお、この要素は動詞の付属要素であるというよりも、名詞(句)に接辞される前置詞であると考えねばならない。というのも、「7.3. 動詞との結びつき」で示したとおり、アスペクト的*fi-*と動詞の結びつきは、それと名詞(句)との結びつきよりも弱いからである(また、アスペクト的*fi-*は単独で、つまり名詞句を伴わずに用いられることはない)。

とはいえ、普通の前置詞にはない特徴もある。それはまず動詞の直接目的語に付くということそのものであり、さらに他の前置詞とも限定的ではあるにしても交替するという点である。これはアスペクト的*fi-*が通常の前置詞という範疇を抜け出て、アスペクト標識として独自の特徴を有していることを示している。

このような脱範疇化は文法化のひとつの特徴をなしている(Hopper et Traugott 2003: 107, Heine et Kuteva 2002: 2)。文法化とは、語彙的な要素なり構成が文法的な機能を表示するものへと変化する現象を指し(Hopper et Traugott 2003: XV)、その変化において、文法化を被りつつある要素は、それが属していた文法的範疇の統語的・形態的特徴を失う脱範疇化を経ることが知られている<sup>31</sup>。この文法化という観点から、普通の前置詞としての意味や働きとは異なる働きをもつアスペクト的*fi-*を理解する上で不可欠だと考えられる。

ところで、Comrie(1976: 8)は、ドイツ語の前置詞*in*とフィンランド語の部分格が進行相を表す現象について触れている<sup>32</sup>。これらの現象を踏まえて、アスペクト的*fi-*と文法化を関連づける上記の説に対して、以下のような2つの反論を提示することも可能である。

- (a) *fi-*のアスペクト的用法もまた、ドイツ語と同じように前置詞の機能のひとつとして見なすことができるならば、文法化されたアスペクト的*fi-*という普通の前置詞と違う特別な範疇をたてる必要はなくなるのではないか。

---

<sup>30</sup> Comrie(1976: 103)においては継続相からの習慣相の拡張が、Bybee et al.(1994: 158-159)においては、継続相と反復相のそれぞれからの習慣相への拡張が論じられている。

<sup>31</sup> When a form undergoes grammaticalization from a lexical to a grammatical form, ...it tends to lose the morphological and syntactic properties that would identify it as a full member of a major grammatical category such as noun or verb. (Hopper et Traugott 2003: 107)

<sup>32</sup> この点に関して、日本言語学会第142回口頭発表(熊切 2011a)において、同様の指摘があった。ここに感謝を申し上げる。



(b) fi-のAspect的用法は、フィンランド語の部分格がそうであるように、それが導く名詞(句)の部分のみが他動詞の影響を受けるというfi-の部分格的用法から生じたと考えられ、厳密にいうとAspect表示形式とは認められないのではないかと。

まず、(a)について考えてみると、Aspect的fi-は、進行相を表せる動詞に限られているというドイツ語の前置詞in (Comrie 1976: 8) とは異なり、多くの他動詞で使われ、また限定的にだが他の前置詞とも交替しうる。この点を考えると、このAspect的fi-についてはやはり、他の場所的fi-やイディオムのfi-とは異なるステータスの要素であるとみなすべきであろう。

また、(b)については、確かにAspect的fi-がその後に続く名詞(句)の部分性を表示していると見られる例が存在する(8.2の諸例を参照されたい)<sup>33</sup>。しかし、それ以上に多く存在するのが、そのような部分性が関与していないと考えられる例である。例えば、(50)《騙す》や(60)《殴る》、(62)《びっくりさせる》の対象である人、あるいは(56)《探す》の対象であるペン、(70)《停める》の対象である車などにおいては、部分性を想定することは難しい<sup>34</sup>。

そもそも、「4. Aspect的用法以外の前置詞fi-の用法」に見たように通常の前置詞としてのfi-には部分格的用法と呼べるものがなく、それゆえ、場所格的用法から部分格的用法が派生し、そこからAspect的fi-が生じたと考えるよりも、前置詞fi-の場所的な意味から直接Aspect的用法が生じたと考えるほうが自然である(また、たとえ前者の考え方が正しいとしても、部分格的用法からは習慣相や反復相の発生を説明できない)。

さらに、文法化研究においても、行為の継続相を表すAspect標識が、しばしば場所を表す要素の文法化した形式であることが指摘されており(Bybee et al. 1994: 131, Heine et Kuteva 2002: 202-203, また日本語の「～している最中/さなか」や「～中」[「仕事中」, 「建設中」など]も参考になる)、これは、Aspect的fi-を、場所を表す前置詞fi-が継続反復相のAspect標識として文法化したものとみなす説を通言語的観点から補強するものである。

そこで、次の問題となるのが、どのような文法化の過程により、Aspect的fi-が、あるいはAspect的fi-構文が生じたのか、ということであるが、これに関しては稿を改めて議論することとしたい。

<sup>33</sup> なお、起点を表す前置詞min- (定冠詞と関係詞の前ではm-) 《～から》が直接目的語に付いて部分を表す用法がある。

ka:n tuʃrub m-at-ta:y ha:ða:, ottʃi:r.  
もし 飲むIMPF.2SG ～から-DEF-お茶 この 飛ぶIMPF.2SG

「もしこのお茶をいづらか飲めば、君は空を飛ぶだろう」

同様の用法は、現代標準アラビア語等の文語にも見られる(以下の引用における語釈は筆者のもの)。

ʃaribtu min-a-l-qahwati. 「私はコーヒーをいづらか飲みました。」(新妻 2009: 323)  
飲むPERF.1SG ～から-挿入母音-DEF-コーヒー (風格)

<sup>34</sup> ただし、モロッコ方言では他動詞の目的語の前に現れるfi-が継続性の他にpartialnessをも表すという(Harrell 2004: 209)。

とはいえ、ひとつだけ触れるべきは、このアスペクト的fi-の被っている文法化が、すでに完了したものではなく、いままさに進行中のものである、ということである<sup>35</sup>。文法化におけるこのような過渡的様態こそが、このアスペクト的fi-の現在の特徴、つまり原則的には自動詞には適用できないという制限<sup>36</sup>や、他の前置詞との限定的な交代に関わっていると考えられる。

## 10. 結論と課題

本稿では、アラビア語チュニス方言のアスペクトを表示する前置詞fi-を取り上げ、その統語的特徴と意味的特徴を記述し論じた上で、このアスペクト的fi-がアスペクト標識として文法化しつつある要素であると結論づけた。

このアスペクト的fi-の統語的特徴のうちあるものは、それが単なる前置詞ではなく、アスペ

<sup>35</sup> 先行研究においては文法化の一般的な過程として、具体的な語彙から接辞を経て屈折辞にいたるという変化が指摘されている (Bybee et al. 1994: 40)。とはいえ、前置詞fi-は、名詞\*fu: (口 (主格形)) に由来するとされ (Brockelmann 1908: 333)、すでに具体的な語彙が接辞になるという文法化を古典アラビア語の成立以前の段階で経ている。ゆえに、あくまでも憶測に過ぎないが、もしかりにアスペクト的fi-が今後がこのまま文法化し続けるならば、その変化は接辞から動詞屈折辞へと至るものになるかもしれない (もともと、古典アラビア語、現代標準アラビア語、近隣の方言がチュニス方言に対して持つ影響力を考慮すれば、そうした変化が起こる可能性は非常に低い)。

<sup>36</sup> 直接目的語をもたない自動詞文において継続反復相を表示する場合には2つの手立てがありうる。ひとつはすでに述べたように、自動詞がイディオムとして前置詞句補部を取る場合には、この前置詞がアスペクト的fi-と交代する (「7.4. 他の前置詞と交替するアスペクト的fi-」)。しかしながら、この交代は非常に限定的なもので、通常は自動詞文の継続反復相は能動分詞qa:ʕəd (およびその活用形) を動詞の前に置くことで表示される。継続相の例としては(45)があり、また次の例は反復相の場合である。

la:, ha-ni: qa:ʕəd ngi:  
NEG ほら-1SG ~しているAP.SG.M 来るIMPF.1SG

「(「ここしばらく君をこの喫茶店で見なかったぞ!」という言葉に対して) いや、ご覧の通り、私は来つづけているよ」

また、他動詞文でも直接目的語が明示されない場合、継続反復相はやはり表示されないが、その場合にも能動分詞qa:ʕəd (およびその活用形) が用いられる。

qa:ʕəd nobni: u-nʕalli:  
~しているAP.SG.M 建てるIMPF.1SG そして-高くするIMPF.1SG

「私は建築し高くしている (= 胸算用している)」

いっぽう、習慣相についていえば、自動詞文と直接目的語のない他動詞文でこれを表示する場合、未完了形自体に習慣を表す用法があるため、qa:ʕəd (およびその活用形) なしでも習慣相を表しうる ((4), (80) の例も参照されたい)。

tumfi: tbi:ʕ f-əs-su:q taqōfi: l-il-ʕja:  
行くIMPF.3SG.F 売るIMPF.3SG.F ~の中で-DEF-スーク 買い物をするIMPF.3SG.F ~のため-DEF-夕食

u-tijni: s-ʕu:f [I-9]  
そして-買うIMPF.3SG.F DEF-羊毛

「彼女は市場に売りに行っては夕食の買い物をし、羊毛を仕入れる」

すなわち、この言語においては未完了形そのまま表される習慣相と、アスペクト的fi-によって表される習慣相という2種の習慣相があるということになる。しかし、この両者の違いに付いては今のところはっきりとしたことは分からない。

クト標識として文法化していると理解することで説明できるように思われる。例えば、完了形との共起不可はアスペクト標識としてfi-が完了というアスペクトと相容れないためであり、また他の前置詞との交替は、このアスペクト的fi-の使用領域が拡大しつつあるためと考えられる。

しかしながら、動詞アスペクト標識が動詞でなく直接目的語に付く前置詞によって表示されるに至った経緯や、このアスペクト的fi-構文の否定形式が一般的な動詞文否定と異なるという例外的事象に関しては、アスペクト標識としてのfi-の意味機能からだけでは説明できるものではなく、いかなる文法化の過程によってアスペクト的fi-構文が発生したのかという通時的観点を踏まえたさらなる考察が必要である。

また、fi-のアスペクト的用法が、この言語の他の動詞形（アスペクト的fi-のない未完了形、完了形、能動分詞）とどのような関係にあり、アスペクト体系全体としてどのような位置づけにあるか、あるいはこの言語における動詞の法とどのような関係にあるのかについても本稿では触れられぬままであった。

そして、もうひとつ、古典アラビア語、現代標準アラビア語、そして各方言におけるアスペクト体系との比較もまた考察すべき重要な問題である。

特に、多くのアラビア語方言で発達している、未完了形にアスペクト標識を接頭させて、継続相や習慣相を表示する文法形式は、チュニス方言のfi-のアスペクト的用法と重なりあう点が大きく興味深い<sup>37</sup>。いわば、意味的には同じ方向を向きつつも、統語的には未完了形の前（接頭辞）か後（アスペクト的fi-）かという点で反対方向に発達したわけであり、それぞれの発展の成り行きを究明することは、チュニス方言ばかりでなくアラビア語方言全体を理解する上でも本質的な事柄を含んでいると考えられる。

## 参考文献

- Aquilina, Joseph (1987) *Maltese-English Dictionary*. Malta: Midsca Books Ltd.  
 Boris, Gilbert (1958) *Lexique du Parler Arabe des Marazig*. Paris: Imprimerie Nationale Libraire C. Klincksieck.  
 Brockelmann, Carl. (1908) *Grundriss der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen. I*. Berlin: Verlag von Reuther & Reichard (Repr., Hildesheim/Zürich/New York: Georg Olms Verlag, 1999)  
 Bybee, Joan, Perkins, Revere, et Pagliuca, William. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago/London: The University of Chicago Press  
 Cohen, David. (1963) *Le Dialecte Arabe Hassāniya de Mauritanie*. Paris: Libraire C. Klincksieck.

<sup>37</sup> マグリブ方言を除く主要なアラビア語方言において動詞に前置されるアスペクト標識については、El-Hassan (2008)が簡潔にまとめている。また、榮谷 (2002)では、エジプト方言における未完了形とアスペクト標識接頭辞のついた未完了形との違いが論じられている。なお、マグリブ方言においても、アスペクト標識接頭辞を持つ方言があり、中にはアスペクト的fi-と共存している場合もある。

- Cohen, David. (1975) *Le Parler Arabe des Juifs de Tunis*. Tome II Etude linguistique. The Hague/Paris: Mouton.
- Cohen, Marcel (1912) *Le parler arabe des Juifs d'Alger*. Paris: Librairie Ancienne H. Champion.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press
- Eisele, John C. (2006) "Aspect" *Encyclopedia of Arabic Language, Vol. I*. ed. Kees Versteegh et al. 195-201. Leiden/Boston: Brill.
- El-Hassan, Shahir (2008) "Mood" *Encyclopedia of Arabic Language, Vol. III*. ed. Kees Versteegh et al. 262-269. Leiden/Boston: Brill.
- Gibson, Maik (2009) "Tunis Arabic" *Encyclopedia of Arabic Language, Vol. IV*. ed. Kees Versteegh et al. 563-571. Leiden/Boston: Brill.
- GrandHenry, Jacques (1972) *Le parler arabe de Cherchell (Algérie)*. Louvain-La-Neuve: Université Catholique de Louvain Institut Orientaliste.
- Harrell, Richard S. (2004) (Originally Published 1962) *A Short Reference Grammar of Moroccan Arabic with Audio CD*. Washington, D.C.: Georgetown University Press
- Harrell et Sobelman. (1966) *A Dictionary of Moroccan Arabic*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Heine, Bernd et Kuteva Tania (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Holcs, Clive (1995) *Modern Arabic, Structures, functions and Varieties*. London/New York: Longman.
- Hopper, Paul J. et Traugott, Elizabeth Closs. (2003) *Grammaticalization* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press
- Horesh, Uri (2009) "Tense" *Encyclopedia of Arabic Language, Vol. IV*. ed. Kees Versteegh et al. 454-458. Leiden/Boston: Brill.
- 熊切拓 (2009) 「アラビア語チュニス方言 (チュニジア) の否定と文構造」 『日本語学会第139回大会予稿集』 134-139. 日本語学会
- 熊切拓 (2010a) 「アラビア語チュニス方言 (チュニジア) の非動詞的文」 『日本語学会第140回大会予稿集』 134-139. 日本語学会
- 熊切拓 (2010b) 「アラビア語チュニス方言のモダリティを表す小辞」 『日本語学会第141回大会予稿集』 372-377. 日本語学会
- 熊切拓 (2011a) 「アラビア語チュニス方言のAspectを表示する前置詞」 『日本語学会第142回大会予稿集』 254-259. 日本語学会
- 熊切拓 (2011b) 「アラビア語チュニス方言の条件文」 『日本語学会 第143回大会予稿集』 148-153. 日本語学会
- Marçais, Philippe (1956) *Le parler Arabe de Djidjielli (Nord constantinois, Algérie)*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient Adrien Maisonneuve.
- Marçais, Philippe (1977) *Esquisse grammaticale de L'Arabe Maghrébin*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient Adrien Maisonneuve.
- Marçais, William et Guïga, Abderrahmân (1958-1961) *Textes arabes de Takrouïna II. Glossaire*. Paris: Bibliothèque de L'École des Langues Orientales Vivantes.
- Mion, Giuliano (2006) "Osservazioni sul Sistema Verbale dell'Arabo di Tunisi" *Rivista degli Studi Orientali*. 78: 1-13. Pisa/Roma: Dipartimento di Studi Orientali dell'Università di Roma «La Sapienza»

- 新妻仁一 (2009) 『アラビア語文法ハンドブック』 東京: 白水社.
- 中野暁雄 (1989) 「アラビア語諸方言」. 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大事典第1巻』 472-483. 東京: 三省堂.
- Owens, Jonathan (1984) *Short reference grammar of eastern Libyan Arabic*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Panetta, Ester (1943) *L'Arabo parlato a Bengasi. Vol. II. Grammatica*. Roma: La Libreria Dello Stato.
- 榮谷温子 (2002) 「アラビア語エジプト方言の未完了形の用法」 『アジア・アフリカ言語文化研究第63号』 265-301. 東京: アジア・アフリカ言語文化研究所
- Singer, H-R. (1984) *Grammatik der Arabischen Mundart der Medina von Tunis*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Talmoudi, Fathi. (1981) *Texts in the Arabic Dialect of Susa (Tunisia), Transcription, Translation, Notes and Glossary*. Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis.

## Syntactic features and meaning of the aspectual preposition of an Arabic dialect of Tunis.

Kumakiri Taku  
takukuma@t3.rim.or.jp

**Keywords:** Arabic, Dialect, Syntax, Aspect, Continuous, Habitual, Iterative,  
Grammaticalization

### Abstract

It is a well-spread phenomenon in Arabic dialects of North Africa that the locative preposition *fi:-* "in" introduces a direct object of transitive verbs, expressing aspectual values such as continuous, iterative, and habitual. The author first describes syntactic features of this aspectual usage of the preposition in Tunisian Arabic, which is the one of the dialects that have developed this usage most. Further description of its meaning reveals that the iterativity of the aspectual *fi:-* correlates with the punctuality of verbs on the one hand, the continuity correlates with non-punctuality of verbs on the other, and that the most basic meaning of this usage is continuous-iterative rather than habitual. The author, examining the whole range of its usage, concludes that the aspectual preposition *fi:-* is in the process of grammaticalization toward an aspectual marker.

(くまぎり・たく)